神奈川県考古学会
考古かながわ 第59号

鎌倉歴史文化交流館の紹介

鎌倉歴史文化交流館長 博士（歴史学） 青木 豊

開館に至る経緯

鎌倉市は、平成25年（2013）2月にセンチュリー財団からの寄付合意書の締結後、同年10月に（仮称）鎌倉歴史文化交流センター整備基本計画検討委員会設置要綱の設置がなされ、翌平成26年3月に（仮称）鎌倉歴史文化交流センター整備基本計画が策定された。平成29年3月に設置条例が公布され、同年5月15日に開館となった。

土地・建物の歴史と由来

本館が建つ土地は、鎌倉幕府の御家人安達氏ゆかりの無量寿院があった場所で、古くより無量寺谷と呼ばれてきた。江戸時代には、刀工正宗の末裔である綱廣の工房の場と伝わる地でもあり、鎌倉の歴史ある場所の一つである。

大正時代には、三菱財閥の岩崎小弥太の別荘がこの地にあり、その後個人住宅として建てられた建築物が当館である。

建築は、香港上海銀行本社やアップル社の新社屋等の建築で名高いイギリスの建築家ノーマン・フォスターの設計事務所に拠るもので、総人造大理石による西洋建築を特徴とする。フォスター建築は、ビル建築が多い中での個人別荘である点が特異であり、将来21世紀の遺産として世界的に評価され、新たな鎌倉の文化資源となるものと予想される。この点からも、建築物および邸内環境の保存と歴史文化交流館として活用の意義は大きいと考えられる。

活動の目的

（1）地域の歴史・文化の確認の場として

観光の目的は、ただ集客や経済のみを追求するものではなく、ふるさとの確認・ふるさとの紹介である。鎌倉に居住する人々にとっては、自分の“ふるさと”の確認の場であり、訪問者には鎌倉の歴史と文化を伝える場でなければならない。

鎌倉歴史文化交流館の外観 ©Forward Stroke inc.

（2）訪問者への紹介・交流の場として

鎌倉を訪れる人々に対しては、鎌倉の歴史と文化を紹介する場としての機能を全うしなければならない。また、訪れた訪問者の交流の場として、訪問者が希求する情報が受け取れる場でなければならない。つまり、鎌倉を知る為の窓口としての博物館でもなければならない。

（3）学校教育との連携

児童・生徒に対しては、郷土学習の場であり“ふるさと”を容易に確認できる場であることが重要である。教科書・副読本とは異なり博物館は、実物資料を基盤とする教育機関であるから、教育効果は十分期待される。

（4）知的娯楽となる“驚きと発見”の場として

博物館では、考古・歴史資料が内蔵する“人とも の”に関する情報は、見学者の知的欲求を充足させなければならない。我が国の博物館展示は、展示ではなく羅列に始終していることは珍しくないので、この点も改善してゆく所存である。

（5）癒しの場・憩いの場・回想の場となる博物館

美術館での美術資料は、勿論のことであるが、考古・歴史資料においても鑑賞対象となる資料は少なくはない。美的な資料を、学術情報の伝達とは別に

個人々々が気に入った資料を鑑賞する場であると同時に、本館の庭園も自然に優れ安らぎを得るものとなっている。

おわりに

我が国の博物館は、展示が不十分であるところから面白くなく、延いては博物館は敬遠されがちである。博物館展示は、資料を“見せる”のではなく、資料を見せながら当該資料が持つ“学術情報を伝える”ことである。当館では、この印象性の薄い展示を、常に“驚きと発見”に拠る見学者の知的欲求を充足させ魅了することができる展示を推し進める予定である。展示が良くなれば博物館は必ず良くなる。

さらには、展示と関連する講演会・講座・体験学習会等々の市民を中心とする研究会・友の会の結成等による市民参加型の博物館を、皆様のお力を戴きながら魅力ある博物館に育てていく所存でございますので、宜しく御指導・御協力をお願い致します。

鎌倉歷史文化交流館案内

鎌倉歷史文化交流館　　高橋　真作

はじめに

鎌倉歷史文化交流館は、子どもから大人までが、鎌倉の歷史的遺産・文化的遺産を学び、体験し、交流できる場として、平成29年5月15日に開館した鎌倉市直営の博物館施設です。著名な建築家ノーマン・フォスター氏が代表を務めるフォスター＋パートナーズの設計による既存建築を活用しながら、鎌倉市内で発掘された出土品を主体に、原始・古代から近現代に至る鎌倉の歷史と文化を通史的に展示しています。ここでは、当館の建物や展示内容などの見どころを紹介します。

建物の紹介

当館の建物を設計したのは、イギリスの著名な建築家ノーマン・フォスター氏が代表を務めるフォスター＋パートナーズです。

フォスター氏は、香港上海銀行本社（1986年）をはじめとする先進的な建築で名声を獲得し、その後も常に世界の建築界をリードしてきました。現在も、アップル社の新社屋をはじめ、世界中で大規模建築や都市計画を手掛けています。

当館の建物は、個人用住宅「Kamakura House」として、2004年に竣工しました。中世以来の土地の来歷をふまえながら、日本人の価値観に合わせた「自然と人工との調和」に意を注いだ建築空間となっています。

平行構造の壁に仕切られた内部空間は、奥へ進むにつれて外部風景を取り込み「暗」から「明」へと移行していきます。一部に光ファイバーが組み込まれた人造大理石や、廃テレビ管を利用したガラスブロックなど、特殊な資材も随所に使用されています。

博物館として整備するにあたっては、当初の意匠をなるべく残すかたちで改修を行いました。このようにこだわり抜かれた建築空間も当館の見どころのひとつです。

館内の紹介

これまで鎌倉に無かった博物館施設をつくることを前提に、原始・古代から近現代に至る鎌倉の歷史を紹介する「通史展示」と、まとまった公開の機会のなかった出土品を紹介する「考古展示」の２本を、展示のコンセプトとしています。

館内に入ってすぐのエントランスは、元はガレージだった場所で、インフォメーションフロアとして活用しています。エントランスから廊下にかけては、刀工正宗の伝統を引く刀剣や、畠山重忠奉納鎧を模した甲冑、流鏑馬、鎌倉彫など、「現代に受け継がれる中世のワザ」を紹介しています。

展示室は、本館の「1:通史展示室（旧ゲストルーム）」「2：中世展示室（旧リビング）」「3：近世・近現代展示室（旧寝室）」と、別館の「4：考古展示室（旧ギャラリー）」で構成されています。

「１：通史展示室」は、原始・古代から近現代に至る鎌倉の歷史を通覧する部屋です。映像展示のほか、写真パネルによる解説と関連する実物資料の展示で鎌倉の歷史を紹介します。

通史展示室

中世展示室

「２：中世展示室」では、考古資料と写真パネルを中心に、中世都市として発展した鎌倉の様子と武士の営みを紹介しています。地形模型に映像を投影するジオラマ・プロジェクションマッピングも見どころです。

「３：近世・近現代展示室」では、政治都市としての求心力を失いながらも、参詣地・観光地として新たな地歩を確立した近世～近代の様子、また歴史的遺産との共生を目指す現代の鎌倉の歩みを紹介しています。

近世・近現代展示室

考古展示室

「４：考古展示室」では、源頼朝が幕府を開いた鎌倉時代を中心に、鎌倉の地で発掘された考古遺物を一堂に展観し、中世びとの生活の有様を紹介しています。最新の発掘成果をふまえた速報展や企画展も随時開催しています。

別館にはほかに「交流室」があります。開館時間中はフリースペースとして使用し、中世の景観を彷彿とさせる谷戸の空間と庭園をご覧いただけます。また時節に応じたイベントブースも適宜設置し、夜間の部屋貸出なども行っています。

土地の来歴

当館の建つ谷戸は「無量寺谷」と呼ばれ、付近一帯には、有力御家人の安達氏の居館や、同氏と関係の深い無量寿院があったといわれています。発掘調査では、寺院または屋敷の一部と庭園、やぐらなどが発見されています。

江戸時代には、相州伝の刀工正宗の後裔である綱廣の屋敷があったと伝えられ､その後大正年間には、三菱財閥第４代当主の岩崎小弥太が、母早苗のために療養所を兼ねた別荘を構えていました。

そして 1997 年から 2004 年にかけて、著名な建築家ノーマン・フォスター氏の設計による２棟の住居が建設されました。この建物と土地を鎌倉市が取得し改修工事が行われ、当館がオープンしました。

庭園と発掘調査

別館の発掘調査では、玉砂利を敷いた鎌倉時代後期の池と遣水の遺構が発見されています。切り立った岩肌を借景に池を配する庭園様式は、著名な瑞泉寺の庭園にも共通するものです。

中世の池に設けられた遣水は、背面の岩肌へと伸びていました。現在でもこの岩肌からは水が染み出し、小さいながらも多様な植物や生物が共存する空間を作り出しています。自然的景観と建物が調和する風景は、鎌倉の谷戸に見られる特徴の一つです。近世以降に多くの手が加えられながらも、中世的な景観の跡を感じられる庭園となっています。

また、庭園に設けられた石段上にはかつて、刀鍛冶を守護する「合鎚稲荷社」が祀られていました。鎌倉市がこの土地と建物を取得するにあたり、社祠や神狐像、参道鳥居は、近隣の葛原岡神社へと移設され、現在も大切にお祀りされています。高台にある稲荷社の跡地は、現在は見晴台として使用し、鎌倉の海の眺望がご覧いただけます。

展覧会

2017 年 10 月 19 日から 12 月 9 日にかけて、最初の展覧会となる企画展「甦る永福寺」を開催しました。史跡永福寺跡の大規模整備が終了したことを記念したもので、永福寺の出土品や関連資料を一同に展観しました。とくに実物の鎌倉時代の瓦を組んだ立体的な展示が好評を得ました。また、最新のＣＧ技術により現代に甦った幻の大寺院の姿をご覧いただくとともに、隔週土曜日には湘南工科大学製作の「ＶＲ（ヴァーチャル・リアリティ）永福寺」を設置し、多くの来館者に体験いただきました。

2018 年 1 月 4 日から 3 月 17 日までは発掘調査速報展 2018 vol.1「特集：鎌倉の構造と境界」（若宮大路周辺遺跡群・大倉幕府周辺遺跡群）を開催しています。今後も、発掘調査の成果に基づいた様々な展覧会を開催していく予定です。

講座・ワークショップ等

これまで当館では、ワークショップ「ペーパー甲冑をつくろう！」､夜間講座「くずし字ことはじめ」､トーク・セッション「仏教作法のイロハを学ぶ」など、多くの講座やイベントを開催してきました。また毎週土曜日 11:00 からの学芸員による展示解説も好評を博しています。

今後も市民交流に根差したさまざまなイベントを開催してまいりますので、ぜひご期待ください。

国指定史跡永福寺（ようふくじ）跡の調査と整備

鎌倉市教育委員会

JR 鎌倉駅の北東約 1.8km、市内二階堂字三堂外の地に、史跡永福寺の中心伽藍があった平坦地が広がる。南に大きく開けた平坦地と、三方を囲む標高 60 m前後の山、さらに北に延びる杉ヶ谷と西ヶ谷を含めた地域が、かつての永福寺の寺域と推定され、昭和 41 年 6 月に約 87,000㎡が国指定史跡に指定された。昭和 56 年度から平成 19 年度まで、史跡環境整備事業の一環として約 15,800㎡の発掘調査を継続的に実施し、明らかになった堂の跡と苑池を中心に公開活用に向けた復元的整備を行ない、平成 29 年度に終了した。

永福寺建立の理由と時期

永福寺は、源頼朝が文治 5 年 (1189) に奥州平泉を攻め滅ぼした後、平泉で見た毛越寺や中尊寺などの寺院を参考として、弟源義経や藤原泰衡等をはじめとする数万の将兵の鎮魂ために建立を思いたったと伝えられている。『吾妻鏡』文治 5 年 (1189)12 月 9 日条には「今日永福寺の事始なり。泰衡管領の精舎を覧しめ、当寺花構の懇府を企てらる。…」とあり、頼朝は奥州から鎌倉に帰り着いて僅か 2 ヶ月後には永福寺の建立を計画している。壮大かつ華やかな永福寺の建立は、自らが滅ぼした戦没者の供養と併せ、ほぼ全国に及ぶ統治権を確立した武家の棟梁としての力を示すためでもあったと考えられる。

建久 3 年 (1192) の 11 月 25 日には中心となる二階堂が完成し、建久 5 年 (1194) までに阿弥陀堂・薬師堂の開堂供養が相次いで行われ、主要な伽藍はこの頃までに完成した。その姿かたちは極楽の様子をそのまま表したようだとも形容され、境内には三堂のほか、多宝塔、鐘楼、惣門、南門、僧坊、別当坊などの建物があったとも伝えられる (『東関紀行』『海道記』『玉林苑』など)。

存続期間

頼朝の死後、頼家、実朝を初めとする歴代将軍により花見、雪見、和歌会、蹴鞠などの行事が境内で行われるようになった。これらの華やかな行事が盛んに催されている状況からは、創建当初に目的とされた怨霊鎮護の場としての性格はあまり感じられず、将軍家の迎賓館的な性格をもつようになったことがわかる。この点でも、京都や平泉とも異なる鎌倉の独自性を見ることができる。

薬師堂の調査

薬師堂の整備

創建後、火災による焼失は幾度かあったが、鎌倉幕府、室町幕府に保護された永福寺はそのたびに修理、再建され寺勢を保っていた。しかし、応永 12 年 (1405)12 月 17 日巳の刻に火災で焼失（『鎌倉大日記』）して以降、再建等の記録はなく、『鎌倉年中行事』の享徳 3 年（1454）正月 11 日には「近代永福寺回禄以降、吉書始めに書かれなくなった。」と記されている。このことから、永福寺は 15 世紀半ば以後に廃絶したものと考えられてきた。

しかし、江戸期、明暦～元治年間頃に発行された「相州鎌倉之絵図」には「かめがふち谷」の北西の山裾に「えいふくじ」と二棟の堂が描かれ、延亨 2 (1745) 年の奥書をもつ「禅宗済家鎌倉五山寿福寺・浄智寺・浄妙寺派下敗壊改派寺院牒」(寿福寺所蔵)

には浄妙寺の末寺として記されている。このような資料からは、永福寺が規模を縮小しながらも江戸時代まで存続していた可能性も伺われるが、かつての大寺院もいつしか廃寺となり忘れられてしまった。

埋もれた歴史

昭和 56 年から平成 19 年まで行われた発掘調査で明らかになった中心伽藍は、二階堂を中心に向かって左 (南) 側の阿弥陀堂、右側 (北) の薬師堂の両脇堂を東向きに配している。寺の中心となる二階堂は 7 間四方の大規模な建物であり、永福寺が当時の日本国内でも有数の規模を持つ大寺院であることが明らかとなった。また、両脇堂から南北に伸びた翼廊は東に折れて前面の池に向かって伸び、中門を経て釣殿へ至る。これらの堂舎に付随する翼廊の形態は、貴族の住宅に見られる寝殿造り (主殿・対屋、廊と中門、釣殿) の形態に関連性を見いだすことができ、創建期の永福寺は寺院でありながら、貴族の住宅的な要素を取り込むという独自性を持つことが認められた。

主要伽藍の前面に広がる池には一面に砂利を敷き詰めた洲浜や岩を並べた岬があり、島も造られていた。二階堂の正面には橋が架けられ、北翼廊脇からは池に遣水を引き込んでいた。庭造りには京都の作庭家 (阿波阿闍梨静空の弟子静玄) が関わっていることから、『作庭記』などとの関連も注目される。

公開活用に向けた整備

昭和 56 年から行われた発掘調査の成果などを基に、平成 9 年に整備基本計画を策定し、源頼朝が大倉幕府を開き武家政権の礎を築いた鎌倉時代初期、永福寺の創建期に焦点を当て、復元的な整備を行うこととなった。

公開活用に向けた整備は平成19年度から着手し、平成 22 年までは不要残土の搬出などを行い、平成 23 年から遺構の復元的整備を進めた。平成 24 ～ 26 年度は二階堂、阿弥陀堂、薬師堂の木製基壇や北・南翼廊と釣殿など、建物の基礎部分の整備を実施した。

三堂の遺構は 60㎝の厚さで保護層を設け、地表には堂の木製基壇の上に礎石を配し、基壇周囲に雨落ち溝を復元した。礎石は発掘調査で出土したものと同じ安山岩を、栃木県の鬼怒川水系から採取し使用している。堂の背後には木塀の基礎と排水溝を復元した。

北翼廊の整備

平成 26 年からは苑池 (堂周辺と池の南岸、西岸、北岸、東岸周辺) の整備に着手し、遣水の復元、その他ベンチや水のみ場などのサービス施設を設置した。

苑池は、池底に平均 30cm の厚さの保護層を設け、水際の景石は露出展示とした。発掘調査成果に基づき、池として遺構を再現できる箇所は砂利を敷いた洲浜で復元した。しかし、池の東及び南側は住宅や市道があり、池として再現することが現状で困難であるため、板柵護岸で本来の池の範囲ではないことを示し、将来的な本格的な整備の余地を残している。なお、池として復元できなかった中島の周辺は園路として整備している。

公開状況等

平成 23 年以降、工事が終了して安全が確保できる範囲を段階的に公開してきており、整備が終了した平成 29 年 6 月からは池に水を張り、整備範囲を全面公開している。

開場時間は 9 時～ 17 時まで（11 月～ 3 月は 16:30 まで）で、年中無休。ただし、大雨や暴風などの気象にかかる警報、注意報が発令されたときは終日閉場となる。駐車場はないので最寄の鎌倉宮までバス及び徒歩でお越しいただき、頼朝が創った寺のスケールを体感していただきたい。

なお、出土遺物の一部は鎌倉歴史文化交流館にて展示しているので、こちらも併せてご見学いただきたい。

大地の一頁

無量寺谷（無量寺跡）の発掘調査

NPO 法人鎌倉考古学研究所・株式会社博通
宮田　眞

位置と歴史的背景

鎌倉市文化交流館（以後交流館）のある「無量寺谷」は源氏山の南麓に展開する谷戸で南東方向に開口する。奥行き約 300 m、谷幅は最大で約 150 m の規模を持ち多くの支谷を内包する。本谷戸には「無量寺」という寺があったとされ、『鎌倉志』には「無量寺ハ興禅寺ノ西ノ方ノ谷ナリ、昔、此処二無量寺ト云う寺有、泉涌寺ノ末寺也シト云、今ハ亡」とある。興禅寺は寿福寺の南隣に有り、寛永年間に建立されているが現在は廃寺である。

『鎌倉廃寺事典』は、『新編鎌倉誌』から、調査地のある無量寺谷を無量寺の故地に当てている。鎌倉時代、無量寺は無量寿院と称されており、新編鎌倉誌では、『吾妻鏡』文永二年六月三日の条に「己巳日中夕立。故秋田城介義景十三年佛事也。於無量壽院。自朔日至今日。或十種供養。或一切経供養也。而今迎正日。供養多宝塔一基。導師若宮別當僧正隆弁・布施被物十重。太刀一、南廷五。砂金卅両。銭百貫文。伊勢入道行願。武藤信濃判官入道行一以下数輩。為結縁詣其場。説法最中・降雨如車軸。于時山上所搆之聴聞假屋寺顛倒。諸人希有逊。其中男女二人。自山嶺落于路之北・半死半生云々。』とあり、この仏事が行われた無量寿院を上記無量寺と同一寺院の扱いをとしている。

発掘調査

交流館用地（発掘調査当時はセンチュリー文化財団用地）では、平成 14 年（2002）～平成 18 年（2006）にかけて 4 次に亘る発掘調査が実施された。本館用地の調査（第 1 次調査）では大型やぐら 1 基を含む合計 5 基のやぐらがやぐら群を形成する形で検出された。さらに別館用地の調査（第 2 次調査）からは、鎌倉時代後期の礎石建物と池・遣り水が谷戸中に配される形で検出され話題を呼んだ。これは鎌倉の現在見られる谷戸内の寺院・塔頭の佇まいを彷彿とさせる。発見された遺構は無量寺の塔頭・支院であろうか？　この遺構群の廃絶年は 14 世紀初頭頃と推測される。

また遺跡名は無量寺跡ではないが、上記調査地点の南西約 200 mに位置する谷戸で実施された鎌倉城遺跡の調査（平成 17 年（2005）、18 年実施）からは 13 世紀から 14 世紀前半頃の堂宇や庫裏と考えられる建物群が検出された。中でも基壇を有する礎石建物の床下からは、火葬骨を納めた小型の曲げ物が発見された。その他にも礎石列の礎石間から常滑三筋壺を納めた土坑が検出されている。また北西側の山裾からは 4 基のやぐらが検出されており、交流館用地の調査成果と同様に小規模な寺院あるいは塔頭があったと考えられる。

無量寺谷隣接地の発掘調査から

谷戸内ではないが谷戸の東隣接地で平成 18 年（2006）～翌 19 年（2007）にかけて実施された調査は、調査面積が 1640㎡と近年の調査では突出している。調査の結果 13 世紀前半から 14 世紀前

1 次調査全景（右写真へ続く）

2 次調査全景（右が谷奥）

半にかけて 4 期 4 面の遺構面が検出された。各遺構面からは合計で 37 棟に上る掘立柱建物が整然と配置される。これは本地点の南方で発見された御成小学校内の武家屋敷に匹敵する規模を誇る。建物群の規模や出土遺物から武家屋敷であることは間違いなさそうである。屋敷の主は確証できないが無量寺と非常に関わりの深い安達氏が有力視されている。

終わりに

無量寺谷には寺院と関わりの深い中世遺構群が高密度で存在していることを知ることができた。しかし堂舎を始めとする無量寺の主要伽藍に関しては、現在の所、未だその端緒すら掴むことができていない。今後の無量寺谷の発掘調査に関してはまだまだ多くの課題が残されていると言えよう。

平成 29年度第 2 回見学会参加記

綾瀬市神崎遺跡公園の環濠公開と海老名市温故館「河原口坊中遺跡展」

児玉　優

2017 年 11 月 4 日（土）、綾瀬市神崎遺跡公園で開催された環濠公開と、海老名市温故館で開催された「河原口坊中遺跡展」の見学会に参加しました。当日は天候に恵まれた暖かい一日で、見学会には会員 16 名の参加がありました。

11 月 3 日と 4 日の二日間、神崎遺跡公園内で保存されている環濠の一部が掘り返され、一般に公開されました。国史跡に指定、保存されている環濠の実物を目にすることができる貴重な機会とあって、多くの来場者が掘り返された環濠を覗き込み、説明に聞き入っている様子でした。このほかにも仮設型の復元住居の野外展示や、弥生時代の様子を再現した VR 体験がありましたが、これには長い列が出来ていたため参加できず、次の機会としました。

その後、海老名駅まで移動のためバスに乗り、海老名駅前の七重塔から温故館までは海老名市教育委員会の押方氏に相模国分寺跡を中心に案内していただきました。

温故館で開催されていた河原口坊中遺跡展では、圏央道建設や相模川河川改修工事に伴い発掘調査された河原口坊中遺跡の出土遺物を扱ったもので、同教育委員会の今野氏に解説をいただきました。展示では、良好な保存状態のまま残された豊富な木製品をはじめ、小銅鐸・銅鐸形土製品や板状鉄斧など、県内でも出土事例の少ない遺物が充実し、河原口坊中遺跡の特徴が示された内容となっていました。

近年では、VR や AR 技術が遺跡・史跡の活用に導入されるようになりました。今後、活用の手法がどのように展開するのか楽しみであり、加えて活用の目的でもある地域に調査成果を還元する重要性を改めて実感した一日となりました。

神崎遺跡公園の環濠

温故館の河原口坊中遺跡展

平成29年度
神奈川県遺跡調査・研究発表会参加記

西田真由子

10月22日日曜日の調査･研究発表会は、午前･午後の部とそれぞれ違ったテーマ設定のもと開催されました。午前は横浜市称名寺D貝塚、同大谷戸南遺跡・同下飯田林遺跡第３地点　同中ノ宮北遺跡第２地点・秦野市寺山中丸遺跡の調査・研究発表がありました。午後は小特集として､「近年行われた学術調査」というテーマ設定のもと、川崎市加瀬台遺跡群第４・７・８地点、同蟹ヶ谷古墳群、同国史跡橘郡衙跡、茅ケ崎市国史跡下寺尾官衙遺跡群、相模原市田名半在家遺跡G地点の発表がありました。

縄文・弥生・古墳・古代・中世といったバラエティーに富んだ発表内容であり、調査時に悩んだ事や調査視点等、発掘調査の表には出ない部分を聞ける点がこういった会の良いところだと思います。例えば２件の国史跡の発表では、調査で得られた様々な知見以外にも保存を考慮する必要があるため、調査に制約を抱えながら最大限の成果を得なければいけない大変さ等、担当者ならではの生のご意見が聞け、会場の関心を集めておりました。

惜しくも荒天と衆議院選挙が重なる事態に陥りましたが、各々方の熱意のある発表により、充実した会となりました。

下寺尾官衙遺跡の発表

平成２９年度考古学講座

『謎の敷石住居の現在』

－縄文時代中期後半から晩期の集落－

平成３０年３月４日（日）開催!!

会場：横浜市歴史博物館　時間：AM10：00～

定員：事前申し込み不要　入場無料(資料は有料)

★　会員の皆様へは別に詳細をおしらせします。会場への直接のお問い合わせはご遠慮ください。★

編集後記

鎌倉歴史文化交流館の開館と国指定史跡永福寺の整備終了が重なったこともあり、関連遺跡を交えて鎌倉市の特集を組むことにしました。鎌倉は歴史ある土地であるにも拘らず、考古資料展示はもとより通史を学ぶ施設も無いという問題を抱えておりました。此度の施設が今後重要な役割を担っていくとともに、さらなる施設の拡充によって地域教育が育まれることを期待します。

考古かながわ　第59号

発　行　神奈川県考古学会
発行日　2018年　2月　10日
印　刷　㈲湘南グッド
発行者　神奈川県考古学会　会長：岡本孝之
編集　連絡誌担当（古田土・工藤・西田）
郵便振替　00240-9-71208
E-mail　soumu@koukokanagawa.com
URL　http://www.koukokanagawa.com